

## 8. 取組内容の進捗状況(令和2年度)

## ■ 共通の成果指標と達成目標

## 国際化関連

## ○ 外国人学生数の拡大とサポートの充実

- 新型コロナウイルスの影響により来日できない留学生の学習機会を確保するため、主に英語での開講科目をオンラインで配信。オンラインによる教育機会の提供を通常時においても整備し、交流の機会拡大を図った。
- 外国人学生のリクルートのため、「オンラインオープンキャンパス」を国内外に向けて開催し、本学現役生や教員と触れ合う機会をリアルタイムで設けた。

## ○ 日本人学生の海外留学促進

- 令和2年度は新型コロナウイルスの影響もあり、自国にいながら海外の大学の授業を受けられるオンライン留学プログラムやオンライン海外短期研修を開発・実施した。
- 理工学部ではCOIL型教育プログラムを取り入れ、海外交流校と合同授業を実施し、先方大学の学生と一緒に学ぶプロジェクト型学習機会を設けた。また、全学的にCOIL型教育を促進するためのプラットフォームの導入準備を進めている。
- 海外交流大学には、新たに1地域が追加され、62か国地域225大学まで拡大。その幅広い海外ネットワークを活用し、交流校である大連外国語大学との研究発表・交流会やカリフォルニア大学サンフランシスコ校の教授・学生との交流会を開催するなど、オンラインを通じた新たな形で国際交流を実現。

## ○ 海外拠点の活動

- 海外事務所(北京・韓国・タイ・フィリピン)の開設により、現地および周辺国に留学している学生の危機管理対応が充実し、学生・保護者の安心・安全確保が進んでいる。令和2年のコロナ禍の対応としては、本学と海外事務所が連携し、現地にいる本学学生へ最新情報の提供、学習機会の確保や帰国手続き等のサポートを行った。
- タイ事務所では留学説明会(年度1回)、タマサート大学で第4回合同セミナー等を運営。韓国事務所でも留学生のネットワークを活用した大学広報や入試説明会・個別相談会をオンラインリアルタイムで開催。
- アフリカとの教育交流の拠点として「創価大学ナイロビ事務所」をケニア・ナイロビ大学内に開設する準備を進めている。

## ○ 多言語の学習機会の充実

- 学生の語学力と異文化理解力の向上のため、英語をはじめとした10か国以上の言語プログラムを提供するワールドランゲージセンター(WLC)では、これまでの対面式からオンラインでの各種プログラムを実施。異なる国にいながらも、さまざまな言語に触れ、学生同士で学べる機会を提供。

## ○ 「南アジア研究センター」の活動

- 令和元年の開設より、南アジアに関するテーマのもと、研究者交流、シンポジウムの開催やデリー大学等との学生交流を推進。
- 令和2年にはオンラインセミナーを3回開催し、10月に開催した国際会議ではサンジェイ・クマール・ヴァルマ駐日インド大使の基調講演を行った。



デリー大学・セントステューブンスカレッジとの  
オンライン学生交流会

## ガバナンス改革関連

## ○ FDセミナー

- TESOLの海外招聘教員による英語教授法や授業の質向上などに関するFDセミナーをオンラインにて3回実施。
- コロナ禍でさまざまな活動のオンライン化が進む中、オンライン授業の質向上やZOOMの活用などに関する、FD・SDセミナーを開催。

## ○ 外国籍教員の役職人事および外国籍職員の採用

- 国際教養学部では開設時に米国籍教員を学部長兼国際交流担当の副学長補に登用し、令和2年度には米国籍教員を学部長に、カナダ籍教員を同副学部長に登用。
- 理工学部では韓国籍教員を副学部長に、ワールドランゲージ・センターでは豪国籍教員を副センター長に登用した。

## 教育改革関連

## ○ 語学教育の成果

- 外国語による授業数は令和2年度には1063科目に増加。シラバスの英語化は10.3%から44.5%までと進捗し、すでに構想最終年度の目標(37.7%)を超えている。
- 本学が設定した外国語力基準(TOEFL iBT® 80相当以上)を達成した学生は、平成25年度の296名から令和2年度には1299名と約4.3倍(全学生の17.5%)に増加した。

## ○ 大学院修士課程「国際平和学研究科」の初の修了生

- 平成30年4月に開設された大学院「国際平和学研究科」では令和2年3月に初の修了生を輩出。卒業生は海外大学院(博士後期課程)進学や国際機関等への就職が決まった。



大学院「国際平和学研究科」1期  
生と教授陣

## ■ 大学独自の成果指標と達成目標

### ○ アフリカ諸大学との交流拡大等

- ・ 事業開始時の6ヶ国8大学から、令和2年度までに10ヶ国14大学まで拡大し、目標の「10ヶ国」を達成。

### ○ 海外大学院合格者数の増加

- ・ 海外大学院に合格した学生は平成25年度の30名から令和2年度には54名へと1.8倍に増加した。主な大学院は、イギリス・オックスフォード大学、ハンガリー・中央ヨーロッパ大学、オランダ・フローニンゲン大学、イギリス・グラスゴー大学など。

## ■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組

### ○ 国内外交流校・機関との共同研究・連携強化

- ・ 本学が推進するアフリカ諸国との国際共同研究の一環がJST・JICAによる地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)に採択。
- ・ 令和2年の準備期間を含め令和3年度より5年間、本学を主幹校として、滋賀県立大学、滋賀県琵琶湖環境科学研究センター、三菱UFJリサーチ&コンサルティングの国内4機関と、バハルダール大学、インジバラ大学、タナ湖周辺水域保護開発機構のエチオピア3機関による、微細藻類培養の水産資源生産に関するプロジェクトに取り組む。



(上) タナ湖の水平線の彼方まで広がるホテイアオイ。  
(右) PLANE3T事業を通してエチオピア・バハルダール大学に建設した小型スピルリナ培養ポンド。

### ○ 各種ランキングのランクイン・ランクアップ

- ・ THE世界大学ランキング日本版では、国際性分野で2年連続トップ10にランクイン。
- ・ QSアジア大学ランキング2021(11月発表)の各項目では、外国籍教員54位(国内4位)、海外派遣交換留学生101位(国内8位)、外国人交換留学生134位(国内17位)、外国人留学生141位(国内26位)にランクイン。

### ○ 本学学長が東南アジア高等教育協会(ASAIHL)の会長に就任

- ・ 令和2年12月、本学馬場学長がASAIHLの会長に就任した。同協会の年次総会を平成30年3月に本学で開催した(日本で初)。

### ○ スーパーグローバル大学創成支援事業の自走化計画

- ・ 本事業並びに終了後のグローバル事業を支える財政的基盤として、本事業専用の寄付事業をスタートし、第3号基本基金にグローバル事業専用基金を設置。合計30億円を目処に「スーパーグローバル大学創成支援事業基金」を設け、目標額を達成しつつある。

### ○ グローバル・シティズンシップ・プログラム(GCP)の取り組み・学生のモチベーション向上

- ・ 平成22年に開始した本学のグランドデザインで、地球市民を目指す高い志を持った学生のための学部横断プログラム(GCP)を開始。開始以来、高い英語力(8割がTOEIC800点越え)の習得、日本代表として国際会議等への参加、海外大学院や外資系企業への就職、8割のGCP生が留学を経験するなど、本事業においても学生全体のモチベーション向上・数値目標達成に大きく貢献している。

## ■ 自由記述欄

### ○ 創立50周年記念行事:「価値創造xSDGs」シリーズイベント

- ・ 令和3年4月2日に創立50周年を迎えるにあたり、SDGsが掲げている各分野をテーマに、有識者を招いての基調講演や本学の取り組みなどを紹介する、「価値創造xSDGs」のシンポジウムを定期的に開催。
- ・ 昨年度のTICAD7ポストイベントに続き、南アフリカ共和国のンゴニヤマ駐日大使や核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)のフィン事務局長による記念講演を開催。また「価値創造xSDGs」Weekとして、平和と人権をテーマとしたシンポジウム、学生主体のユースセッションや展示を1週間にわたって開催。



核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)のフィン事務局長による記念講演

### ○ 留学生のための「バーチャル窓口」の設置

- ・ いつどこからでも国際課の職員と相談できるバーチャル相談窓口を設置し、留学生のサポートを開始。

### ○ 学生の活躍

- ・ 本学学生が日露オンライン青年フォーラムで基調報告。本フォーラムは、日露関係の将来を担う両国の学生間で双方に関心のあるテーマに基づき討議を行うことを目的に開催されている。
- ・ 本学理工学研究科の学生(留学生)が「The 2nd World Conference on Waste Management 2021」にて優秀講演賞を受賞。
- ・ オンラインで開催された「第18回木質炭化学会」の研究発表会にて、本学理工学研究科環境共生工学専攻・博士前期課程(スペイン・バリャドリッド大学ダブルディグリープログラム)の留学生が優秀発表賞(奨励部門)を受賞。



南アフリカ共和国のンゴニヤマ駐日大使による記念講演

赤十字国際委員会(ICRC)駐日代表レジス・サビオ氏



グリフィス大学  
前 宗教・文化間対話センター長  
ブライアン・アダムス氏